

《第 533 回(2026 年 3 月 12 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ものぐさトミー』 ペーン・デュボア/文・絵, 松岡 享子/訳 岩波書店

2月、『ものぐさトミー』を読みました。1960年代にアメリカで書かれた絵本で、電気じかけの家に住んでいるトミー・ナマケンボという男の子のお話です。トミーは、起きるのも、着替えるのも、ご飯を食べるのも、全部、電気じかけです。ところがある日、かみなりがなり、電柱がたおれ、トミーの家に電気を送っていた電線が切れて、停電になってしまいます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●日常的なものぐさな話かと思っていたので、読んでびっくりした。お風呂は面倒くさいと思うこともあるが、ご飯は自分の手で食べたい。昔に書かれた本なので、今なら電気じかけでできそう。奇想天外な話。子どもたちはどう思うのか。

●子どもは単純に楽しむ。最後は新しい生活に向かって行く話。でも、長い階段も目的があってできるならやればいいのか。電気じかけの家は、子どもたちのあこがれ。発想がすごいと思う。

●ハチャメチャな話。長い階段はエスカレーターにはならなかったのか。ご飯のときに音楽が流れるのがいい。今考える近未来の電気じかけの発想と1960年代の発想が同じ。でも、トミーの生活は便利とは違う。今の私たちは便利さを求めている。

●文章の言い回しが難しい。「ものぐさ」も今は使われていない。発明と突飛な発想が子どもたちには喜ばれるかも。

●1960年代の電気じかけは、スムーズでない、アナログな楽しさがある。終わり方がシュール。著者には人を喜ばせたいという気持ちがあるのかも。今の子どもたちも楽しめる絵本だと思う。

●どうしてトミーはこういう生活をしているんだろう。挿絵を見ると、好きで電気じかけでいるわけではなさそう。時代が変わっても変わらない、子どもにとっては夢のある本。この本を読んで夢を見て欲しい。

●チャップリンの映画「モダン・タイムス」と重なる部分があると思った。子どもが読んだら楽しいだろうと思う。展開が面白かった。

●生活を変えようとするトミーはかしこい子だと思う。これではダメだと気がつく、前向きな話。

●読み終わったらトミーがかわいく見える。停電後はページをめくるごとに楽しかった。心をいれかえる最後になるとは思わなかった。まわりに迷惑をかけず、一人で生活しているから楽しく読めた。きっと外へも出ていけるように成長するだろう。

●至れり尽くせりの機械のユニークさにびっくり。面白くて楽しいお話だけど、少し怖い。今は AI の進化が目覚ましい。AI に操られる未来が遠くない今の時代には、ゾッとのお話にも思えた。

●小学生の子どもたちと読んだら楽しいだろうと思う。着替えて学校に行くのかと思ったら、長い階段を登って一日が終わる。大人はいろいろ考えてしまうが、子どもたちに読んで楽しんでもらいたい本。一度読めば、大人になっても思い出す本になりそう。

次回 4月9日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

『消えたモナ・リザ』ニコラス・デイ/作, 千葉 茂樹/訳 小学館

※申込み・参加費は不要です。